

幼児画における色彩的発達段階

野村 正 則

Color Developmental Stage of Early Children's Art

MASANORI NOMURA

This investigation was made as to the coloring of drawing on preschool children in Oita Prefecture. On the basis of the results of this investigation, I compared it with Arnheim's and Ide's studies. Synthetically judging those two studies, we got the conclusion that the development of color sensation of children was divided into five stages.

Lightness-responding stage (0 to 2 years) : The infant in this stage draws at random. And he responds strongly to forms and contrasts rather than colors.

Physiologically color selecting stage (2 to 3 years) : The infant in this stage gets the ability of naming.

He responds to high saturation color such as red or yellow. On the other hand he doesn't respond so strongly to high lightness and middle saturation colors such as skin-color, and pale blue.

Hue arranging stage (3 to 5 years) : The child belongs to catalogue stage. He perceives the difference of hues and begins to use many colors.

Color concept and color aspect recognizing stage (4 to 5 years) : He is in the beginning of schema stage. He conceives the notion of color and shows the tendency to consider color as an aspect.

Individual color and decorating color stage (5 to 6 years) : He is in the middle of schema stage. In coloring he begins to show realistic drawing and pure decorating when he looks at objects in a short distance.

はじめに

印刷技術やカラーテレビの発達により現代の社会は、色彩過剰文明となっている。このような環境の中で生活し、成長する幼児が、色彩に対して敏感に反応し、大きな興味を示すのは当然のことと思われる。そこで、色彩が幼児の発達にどのような影響を及ぼすのかという疑問が生じてくる。

しかしながら、色彩と発達段階に関する研究は非常に少なく、主な研究としては次の三者が知られている。アルンハイム¹⁾は、ウエルナー(Werner)の意見として、形に主に反応する時期(0-3歳)、色彩に主に反応する時期(3-6歳)、

色彩より形を選択の基準とする時期(6歳以上)に分類できるとしている。井手²⁾は幼児の色彩のとらえ方の発達段階として、生理色段階(0-3歳)、概念色段階(4-5歳)、固有色段階(5-6歳)に分類している。リュケ³⁾は幼児の色彩に関しては、写実性と装飾性という二面をとりあげている。また、1969年に発表された文部省の幼稚園教育指導書・領域編 絵画製作⁴⁾では幼児の発達の章で“色については、幼児期になればある程度正確に個々の色の識別はできるようになるが、ひとつのものの表面の色を正確にとらえ再現することは、まだ一般に困難である。さらに個々のものをいろいろっている色相と陰影の微妙な変化を見分けるようになるのは、一般に

児童期にはいつてからである。したがって、幼児期では、空は青、地面は茶、といったような簡単な色彩表現が多い。また、ものの形をかく場合、色を無視して、手あたりしだいにつかんだクレヨンでかいたりすることもよくみられる。なお、幼児は一般に赤系統の色を好むといわれるが、これは、それぞれの状況によって多少変化する。”と述べ、発達の特徴の中では色彩に関してはほとんど触れていない。

そこで、今日の色彩過剰とも思われる社会が幼児に及ぼす影響を考えると、幼児の発達と色彩との関係をもう少し深く究明してみる必要がある時期に来ていると思われる。そこで、本研究では、0—6歳を5つの段階に分類し、その特徴の明示を試みた。

まず第一に1981年5月に収集した大分県を主たる居住地とする幼児のクレヨンによる自由描画より、6歳未満児のもの約800枚を無作為に抽出し、年齢別に男女の色彩使用頻度を調べた。

その結果を、1979年8月に収集した3—6歳児の色彩調査と比較して、そこになんらかの特徴が表われるかどうかを考察した。

次に、上記の資料を従来の図象的見地での発達段階によって分類し、色彩の上で発達の特徴が表われるかどうかを検討した。

また、幼児画の発達に関する研究から色彩に関しての研究部分を抜粋し、今回の資料と比較検討し、考察を加えた。

また、図象的見地での発達段階に関しては、ローエンフェルド³⁾による発達の特徴を主に分類したが、年齢による区分など現状に即さない部分は、文部省の幼稚園教育指導書⁴⁾及び今回の調査結果を参考に改めた。しかしながらこの発達段階区分は、色彩的発達との比較検討のための便宜的なものであり、けっして固定的なものではないことはいうまでもない。

色彩調査結果

使用色

幼児のクレヨンによる描画に使用される色は、1—12色が最も多く、それ以上使用される

ことはまれであった。これは市販されているクレヨンに12色セットが多いことに起因すると推測され、使用されている色も、12色セットの色とほぼ一致し、この推測を裏づけている。ここでは、市販されているクレヨンの慣用色名を用いることとし、表1にマンセルの色彩基準と対比して表示しておく。

使用色数

1枚の描画に使用されている色数は年齢によって異なる。前回(1979年)の資料によると、1枚当りの平均使用色数は、3歳児で3.7色、4歳児で5.6色、5歳児で6.1色、6歳児で5.8色となった。しかし、3歳児ではそのうち33%が、1色のみ使用であったため、1色使用児を除外した平均使用色数では、5.1色となり4—6歳児の平均に近い数値となった。これは色彩使用において、色数での境界が、3歳初期にあるのではないかと推測する資料となった。そこで、図象的な意味での発達段階によって、色の平均使用数を調べてみると、錯画期2.3色、命名期4.5色、カタログ期6.8色、図式期6.2色となり、カタログ期に最も多くの色数が使用され、図式期に入るとやや減少する傾向がみられた。

年齢別にみる色彩の使用頻度(選択率)

2歳女児では〔黒〕の使用率が最も高く、〔赤〕がこれに続いているが、他の色は〔黒〕〔赤〕の半分以下で、〔みどり〕が少ない以外は比較的平均している。2歳男児では、〔赤〕〔みどり〕〔青〕の使用率が高く低明度の原色に集中している。男女の平均値としては、〔みずいろ〕〔はだいろ〕など高明度・中彩度の色の使用率が低く、スペクトルの両端の色、〔赤と青〕が〔黒〕とともに多く使用される傾向がみられた(図1)。

3歳児になると〔赤〕の使用率が最も高く、〔黒〕も依然多く使用されている。〔青〕の使用率も高く、この傾向は、4—5歳児にも共通してみられる(図2・3・4)。

6歳児になると、男女による使用色の相異が生じ、男児では、〔黒〕〔赤〕および青系統の色が多く、女児では、赤系統の色が多く使用される

傾向がみられる (図5)。

3-6歳児に対して行なった、前回(1979年)の調査資料は、ほぼ今回の調査結果と一致しており、この方法が客観性をもっていることをものがたっている。

表1 主に使用されたクレヨンの色

クレヨンの色名	マンセル基準による	
	色 相	明度/彩度
ももいろ(ピンク)	6.0RP	6.5/12
あ か	5.0R	4.5/14
はだいろ	10.0R	8.0/8
ちやいろ	2.0YR	3.5/8
だいだい(オレンジ)	4.0YR	6.5/14
き いろ	5.0Y	8.0/13.5
きみどり	6.0GY	7.0/12
みどり	6.0G	5.0/10
みずいろ	6.0B	7.0/9
あ お	3.0PB	3.5/13
むらさき	1.0RP	5.0/11
く ろ	N-1.0	(明度のみ)
はいいろ	N-6.5	(明度のみ)

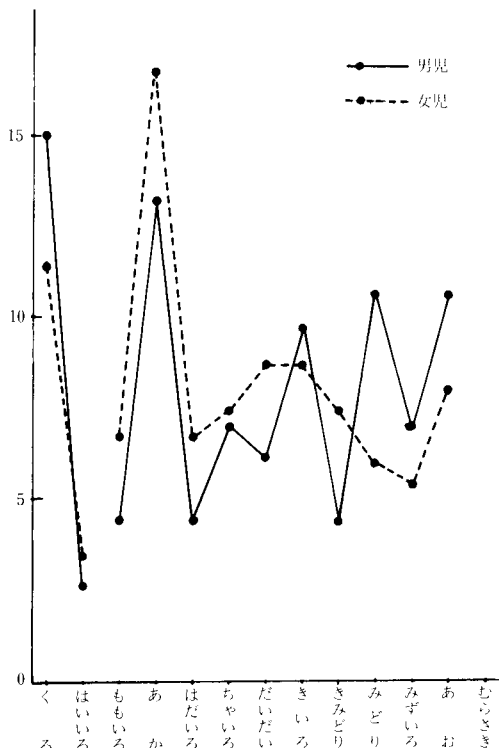


図2 3歳児における色の使用頻度

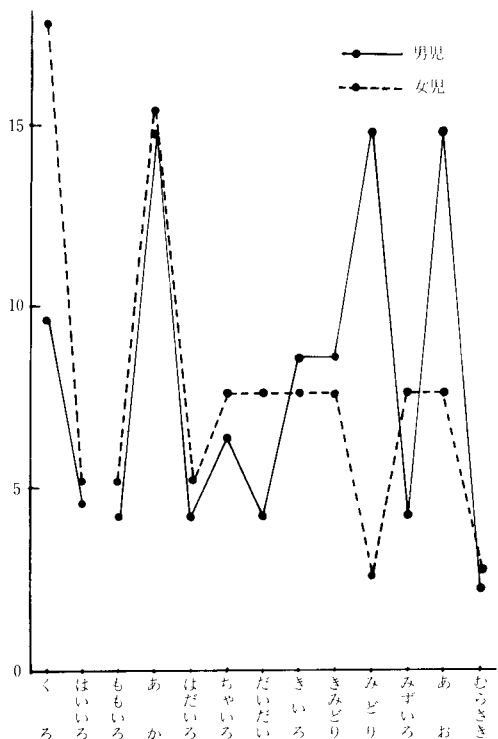


図1 2歳児における色の使用頻度

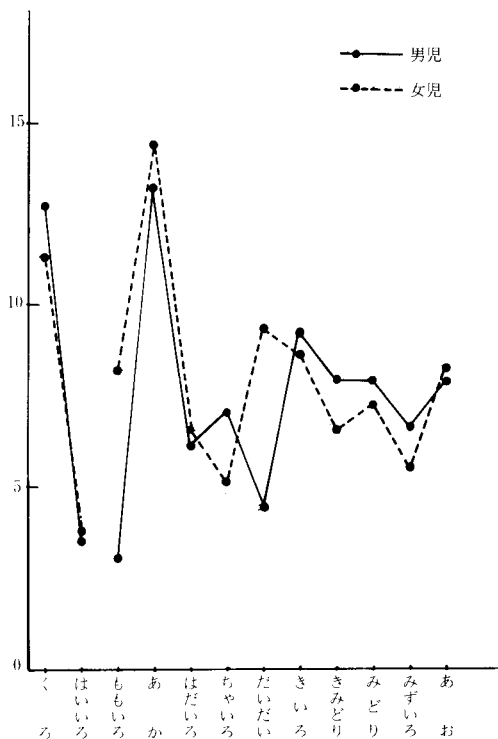


図3 4歳児における色の使用頻度

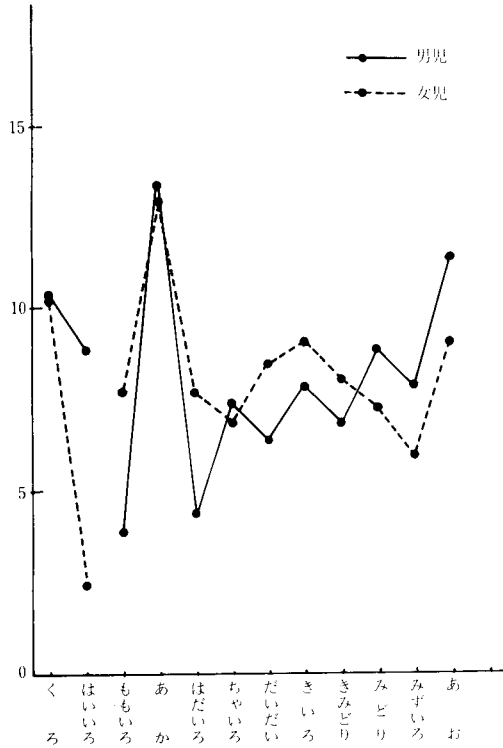


図4 5歳児における色の使用頻度

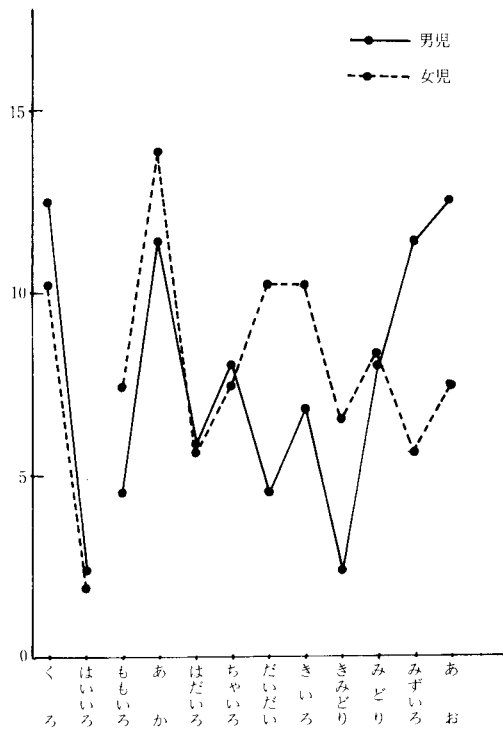


図5 6歳児における色の使用頻度

発達段階による使用色

錯画期は資料が少なく、ほとんどの色が1-3回使用されたのみであるため、傾向を知るためのデータとはなり得なかった。

命名期では〔赤〕〔黒〕〔青〕の使用率がきわめて高く、逆に高明度・中彩度色の使用率が極端に低く、使用する色にかたよりがみられた。

カタログ期では〔赤〕〔黒〕の使用率は依然高いものの、使用する色のかたよりは、命名期にくらべてずっと少なくなっている。

図式期では、カタログ期と類似した傾向を示し、目的に応じて色を使用している(図6)。

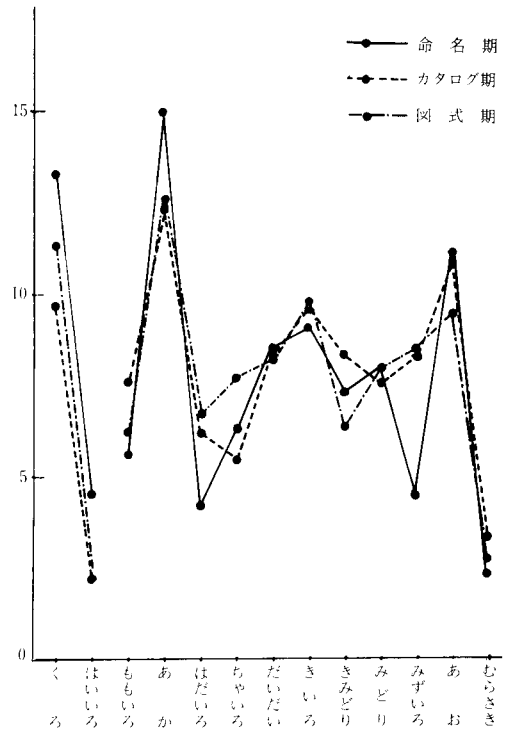


図6 発達段階別による色彩使用頻度

色彩の心理学的・生理学的意味

幼児画における色彩に関する研究はあまり多くはないが、色彩の心理学的意味に関しては、アメリカのアルシュウラとハットイックによる研究が最もよく知られている。日本では久保貞次郎による研究⁹⁾が事例も多く、参考になる。

また、色彩による性格検査には、ロールシャッハ・テストや、色彩象徴性格検査法 (CST) が知られている。これらは、個々の色のもたらす感情や、色の使用法などから、性格や心理的諸問題に目が向けられ、精神療法や、性格診断に効果をあげている。

ところが、幼児はその発達に応じて色彩の価値に相異が生じてくる。たとえば、ななめのストロークしか描けない2歳児の〔赤〕と、5歳児のぬりつぶした〔赤〕のストロークとでは、当然意味が異なる。一般的には〔赤〕の乱雑なストロークによるぬりつぶしは、攻撃的な感情の表現と解釈されるが、1, 2歳児にとっては、手の運動機能の発達から、ななめのストロークしか描けないのであって、健全な表出行為なのである。したがって、幼児の発達に応じた色彩の意味を的確に把握しておかないと、誤解を生じるおそれがある。ところが、発達と色彩の関連的研究においては資料が乏しく、今後さらに研究が深められる必要性を感じる。

しかも、現在知られている研究でも、井手²⁾は0—3歳児を(生理色段階)と位置づけ、アルンハイム¹⁾は(形に主に反応する時期)と述べているように研究者によって見解が異なっている。

そこで、井手²⁾の意見を要約してみると、“生後まもなくから3歳ぐらいまでの幼児は、色彩に対しておもに生理的に反応する。それは視神経の色の受容器が、色もっている直接の視刺激に、生理的に興奮したり、静止したりする反応である。また、乳児の玩具(回転メリー)に対する反応から、まず赤系統の色に反応し、〔赤〕を認めることができれば、色盲でないかぎり同時にその補色である緑青系統の色に反応することができるので、次に与えられる玩具として、白地に〔赤〕と〔緑〕をあしらった、ガラガラが適している。”と述べている。

アルンハイム¹⁾は、いろいろな研究者が用いた、色と形の比較刺激に関する実験結果を総括したウエルナーの意見として、“3歳以下の子どもは形によって選択する傾向がよくなる、3歳から6歳までの子どもは色のあっているものを選択している。就学前の子どもは、こういう選択

をちゅうちょなくした。しかし6歳以上の子どもは当惑しながらも選択基準として形のほうを多くもちいた。これは、乳幼児の反応は運動的行動によって規定され、したがってものつかみやすい性質によるから、形が中心になるのだ。”と説明している。

そこで乳幼児の視覚の発達を生理学的にみると、“網膜の中央部は網膜の厚さがとくに薄く、へこんでいるので中心窩とよんでおり、ここの網膜細胞は色素が多く、黄色くみえるので、黄斑とよんでいる。この部分がおとななみになるには生後4か月をついやし、人間は眼の中心窩に視線を合わせることによって、もっともよい視力をえ、また色やかたちの識別がよくなる。この中心窩をフルに使って物を見ることを、視覚生理学では中心視とよび、これに対し中心窩以外の網膜を使って物を見ることを、周辺視とよぶ。生後1—2か月から中心視ははじまり、おとななみに視力が発達するのは、6か月くらいかかる。

一般に、ある物を見るとき、視線は眼球運動ですばやく動き、物体の中のある点に、短時間(1/1000~1/5秒)であるが固定する。しかし固定しているときでも1秒間に50回ぐらいの振動をおこなって、みている物体をスキヤニング(走査)している。中心視による反射的な動きは、サッカデ反射とよばれ、画像のパターンの中で関心のある点、重要な点に集中し、脳が発達し、眼筋運動が発達して、追視がてぎわよくなる生後2—3か月ころになればフルに活用される。新生児は、垂直の物体、鋭い角の物体であればその先端に、その視線を固定させる頻度が高い、また、水平な物体に対しては、ほとんど視線を固定しない。また、複雑な図形を動かしたり、卵形をした人間の顔の絵を見せると、その絵の目の部分をはっきりと追視する。”⁷⁾

また、“視細胞には錐体と杆体との二種類がある。錐体は日中の明るい光と、色を感じ、杆体はたそがれや月明りのうすぐらい光を感じるだけで、色は感じない。網膜上では中心窩は主として錐体からできているが周辺部に移るにつれて、杆体が数を増す。したがって外界の物

を見ると、昼間は錐体がはたらいっているから、網膜の中心窩で像も色もよく見える——これを昼間視という。しかし、暗くなると杆体のみがはたらき、スペクトルをみても、明度のみの無彩色の光帯としてしか見えなくなる——これを黄昏視という。”⁸⁾

ここで、先にのべた井手²⁾の玩具に対する幼児の反応を、上記の視覚生理学的側面から考察してみると、まず、乳幼児が、回転メリーに反応を示すのは、そこに使用されている、〔赤〕という色彩ではなくて、動くものに対する反応であり、垂直の物体、またはその先端に対する視線の固定、と考えたほうが自然である。しかも、先にあげたウエルナーの実験で用いられた比較刺激の色は〔赤〕であり、比較刺激の形は三角形であった。それにもかかわらず、3歳以下では、〔赤〕に反応するより、形への反応が圧倒的に強かったということは、この年齢の幼児が〔赤〕という色相に対して生理的に反応する、と結論づけるのには早急すぎるのではないだろうか。

幼児画における色彩の発達

井手²⁾は、生理色段階に続いて、概念色段階(4-5歳)、固有色段階(5-6歳)に分類している。

リュケ³⁾は、この時期を色彩的にも写実性と装飾性に分類できるとしている。

本研究では、もう少し細かな点にまで留意し、6歳までの幼児画の発達段階を図象的見地から便宜的に4つの段階に分類し、それぞれの発達段階(1, 錯画期0-2歳, 2, 命名期2-3歳, 3, カタログ期3-5歳, 4, 図式期4-6歳)にそって、上記の研究結果と、今回の調査結果を比較検討し、色彩における発達段階の分類を試みた。

錯画期における色彩的発達

錯画期 0-2歳, 錯画期(なぐりがきの段階)は、スクリブルなどとも言われ、研究者によって年齢や区分基準に大きなズレがある。ローエンフェルド⁵⁾は、錯画期を2-4歳とし、さらに4つに細分して、①未分化(でたらめ)、②経線または制御されたなぐりがき、③円形なぐりがき、

④なぐりがきへの注釈としている。同じようななぐりがきであっても、円形なぐりがきの頃から、かいた線や点に意味が生じてくる。(一見同じような円であっても、ママであったり、きしゃであったりする)。そのためここでは、①②を錯画期として分類し、その年齢を0-2歳とし、③④は命名期として、次の発達段階として考えた。

この時期の幼児の絵は、点の集積であったり、一方向あるいはジグザグの線であったりする。かくという意識でかかれるのではなく、手や腕を動かすことへの喜びであり、またその結果として白い紙の上に生じた軌跡への驚きであったりする、絵というより、むしろ絵画的表出というべきであろう。

なお、文部省の幼稚園教育指導書領域編 絵画製作⁴⁾では、造形活動の前段階としての自発的活動としての時期(誕生-1年)、としてこの時期を区分している。

色彩上の特徴 1-2歳児がクレヨンでなにかをかく場合、最初に手にしたクレヨンを口にもっていったり、もてあそんだり、紙にこすりつけたり、といった行為から移行していくことが多いが、その手にしたクレヨンを他のクレヨンと意図的にとりかえて着色しようとする様子は感じられない。このことは、1-2歳児にとってどのような意味をもっているのだろうか。最初に手にしたクレヨンが、まったくの偶然にもとづくのであれば、選ばれたクレヨンの使用率はほぼ同じとなるはずである。しかしながら、大分県における、2度の調査結果から、この年齢の幼児が使用する色の中で、〔赤〕または、〔黒〕が出現する頻度はきわめて大きく、〔赤〕または〔黒〕が出現する絵はそれぞれ60%に達し、〔赤〕か〔黒〕のどちらかが全く出現しない絵は約28%にすぎなかった。また、男児においては、〔黒〕のかわりに、〔青〕〔緑〕の出現率も高く、低明度の色彩が白い紙に対して生み出すコントラストの強さへの反応を喜ぶ傾向があるのではないかと推測された。

また、井手²⁾は、ガラガラの例をあげ、補色に対する反応をのべているが、白地に〔赤〕と〔緑〕を配したガラガラでも、〔赤〕と〔黒〕を配した

ガラガラでも、乳幼児にとっての反応はあまり変わらないのではないかと考えられる。なぜならば、色の嗜好調査において、〔赤〕と〔緑〕という組み合わせを選択した例は、この年齢では8%にとどまり、〔赤〕と〔青〕、〔赤〕と〔きみどり〕を含めても、補色対比を選択した例は20%未満で、この年齢の色相に対する知覚はまだじゅうぶん発達しておらず、従来〔赤〕が最も幼児に好まれると考えられていたが、実際には、〔赤〕と〔黒〕の出現率がほとんど同じであることから推測して、〔赤〕も〔黒〕も幼児にとって同価値の刺激と考えられる。

以上のような結果から、1-2歳の幼児においては、色相に対する発達はきわめて低く、形やコントラストに対する反応が優先すると考えられ、色彩における発達段階としては、明度反応期とするのが妥当と思われる。

命名期における色彩的発達

命名期 2-3歳、ローエンフェルド⁵⁾の分類によれば、錯画期の後半③④に当り、円形なぐりがきはじまり、線に連続性や密度のちがいでてくる。文部省の指導書⁴⁾では、表現が記号としての意味をもつ時期(1, 2-3歳)に当り、なぐりがきの円に対して、ママとか、ぼくという意味が生じたり、きしゃといいながら連続線を描いたり、同じような線にへびと命名したりする。

色彩上の特徴 この時期の幼児は、幼児期全体の中でも特に〔赤〕の使用率が高く、井手²⁾のいういわゆる(生理色段階)ではないかと思われる。視覚も明度反応から色相反応に移行していく時期と考えられ、明度反応としての〔黒〕よりも彩度の高い〔赤〕により興味を示す。

また、高明度・中彩度の〔みずいろ〕〔はだいろ〕などの使用率は低く、その他の色の使用率はほぼ平均している。なお、依然として1色のみの使用が半数をしめ、1枚の絵に対する平均使用色数は3歳児で3.7色であるが、命名期に属する幼児では、1-2色が多い、また、使用している色と、描いているものの間には因果関係はみられず、色を選ぶのは生理的欲求によると

ころが大きいと考えられる。ただこの頃から1色ではあきたらず、途中で他の色と持ちかえて使用することもみられるようになり、生理的に色を選ぶ傾向が表われてくる。このためにこの時期を色彩上の発達からは、生理色選択期と位置づける。

カタログ期における色彩的発達

カタログ期 3-5歳、この時期になると幼児のかく図形が、ものの形として識別できるようになり、頭足人などの幼児独特の表現も生まれてくる。大きさの関係や位置に対する意識はなく、つぎつぎと図形をかき並べていく、文部省の指導書⁴⁾では、“表現が記号としての意味をもつ時期(2, 3-4歳)にあてはまり、この時期に移行する年齢は、個人によって差が大きい、比較的期間は短く、次の図式期に移行する準備段階と考えられている。

色彩上の特徴 ウエルナーは、“3歳から6歳までの子どもは色のあっているものを、ちゅうちょなく選択する”¹⁾として、“視覚的特徴が優勢になると、大多数の就学前児童は色のつよい知覚に心がひかれる。”¹⁾といっている。この時期の幼児の絵は、色数が急に増え、多くの絵は5-6色が使用されている。ひきつづき〔赤〕〔黒〕に対する使用頻度は高いが、その他の色に関しては、ほとんど同率で使用される傾向がある。また、その使用方法もクレヨンの箱にある色を、次から次へと持ちかえて使用しており、色と描かれている物との因果関係はほとんどみられない。無秩序に手あたりしだい色を使っているようだが、前に使用した色と次に用いる色のちがいは知覚しており、そのちがいを楽しむ様子も見うけられる。これは、はっきりとした色相の知覚が生じたことを意味すると推測され、ウエルナーのいうように、色相の発見に対する喜びから、すべての色を使ってみようとする欲求が強く働く時期であり、〔赤〕〔黒〕以外の色をすべて同価値に使用する、色相羅列期と呼ぶのが適当と思われる。しかしながら、頭髪などに好んで〔黒〕を使用しており、概念色段階への移行期と考えられる。

図式期における色彩的発達

図式期 4—7, 8歳, ローエンフェルド⁵⁾の分類によると, 図式期(様式化の段階)は, 7—9歳とされているが, 文部省の指導書⁴⁾では, 表現が特定のものの記号として意図される時期(I), としてその年齢を(4, 5—7, 8歳)としている。今回の調査でも4歳児から図式期に達している。このため, ここでは年齢区分としては, 4—7, 8歳とし, その中でも就学前の幼児を対象に考察した。

この時期の特徴としては, 基底線や太陽など天地を象徴するものが表われ, 位置関係が生じる。またこの時期は概念獲得の時期でもあり, 人の形, 花の形, 家の形などがパターンとして確立する。

色彩上の特徴 この時期では, 色彩のもつ意味はひじょうに大きく, 絵画の要素として[色]がはじめて, 意図的に用いられる時期といっても過言ではないだろう。色彩においても概念の獲得は進み, 花は赤, 木の幹は茶, 空は青, 木の葉は緑, といったように, ぬる色をもつと結びつけて決めてしまう傾向が強い, 天の象徴である太陽をぬるための[赤]の使用頻度は依然として高いが, ものによって色を使いわけするため各色が平均的に使用される。また男女による色の使用傾向に相異が生じるが, 描く対象とその対象のもつ色の相異がその要因である。

リュケ³⁾は幼児の色彩に関して, 写実性と装飾性という二面をとりあげているが, 図式期の幼児においてこの指摘はあてはまる。井手²⁾は, この時期を二分して, 概念色段階4—5歳, と固有色段階5—6歳としているが, 井手²⁾の固有色とリュケ³⁾のいう色の写実性とは意味的に一致する。また, 装飾性に関しては, リュケ³⁾本人も“衣服など対象がどんな色でもかまわない場合で, 色が対象にとって本質的な場合には, 彩色は写実になる”といっているように, ものの色そのものに対する写実性, つまり井手²⁾のいう固有色の発見に対応する要素と考えられる。

この二つの特徴の他にこの時期で見落してはならない特徴として色面の発生がある。カタロ

グ期までの幼児は, 色を使用するにしてもほとんどが線描であったのに対し, この時期からは, 面をぬりつぶす作業が多くみられ, これは色彩的要素からみて, カタログ期から, 図式期への移行を知る目安ともなりうる, 重要な発達の特徴である。

これらの特徴を発生順に並べると, 1, 概念色の発生, 2, 色面の発生, 3, 固有色の発見, 4, 装飾色の使用と一応順序だててはできるが, 個人差もあり, 移行も微妙で判断がむずかしい。特に, 固有色の発見は, 5, 6歳児にもみとめられるが, 固有色の使用となると, 描画材料がクレヨンの場合は, 概念色と区別することは困難である。ただ, リュケ³⁾の論からすれば, 装飾的に色彩が使用されたことは, 固有色に対する認識が生じたものと考えられる。

そこで本研究では, 概念色の獲得と色面の発生を一時期としてとらえ, 次の段階として, 固有色と装飾色の使用期をとらえた。したがって, 色彩上の発達としては, 図式期を, 概念色・色面発生期, 4—5歳, 固有色・装飾色期, 5—6歳, の二段階に区分することとする。

まとめ

上記のような考察結果から, 幼児画における色彩的発達段階を次の5期に区分した。

1, 明度反応期 0—2歳, 錯画期にあたり, 色よりは, 形やコントラストに強く反応する。

2, 生理色選択期 2—3歳, 命名期にあたり, [赤]や[黄]など彩度の高い原色に反応する。反対に[はだいろ][みずいろ]など高明度・中彩度の色にはあまり反応しない。

3, 色相羅列期 3—5歳, カタログ期にあたり, 色相の違いを知覚し, 色を使う欲求がはじまる。

4, 概念色・色面発生期, 4—5歳, 図式期の初期にあたり, 色を概念として知覚し, 色を面としてぬる傾向が多くなる。

5, 固有色・装飾色期 5—6歳, 図式期中期にあたり, 色彩面において, 近距離でみたときの写実性及び, 純粋な装飾性が生じる。

おわりに

色彩に関する調査は、方法や状況によって結果が極端に異なり、今回は省略したが色の嗜好調査などは、私の知る範囲ではスペクトルの両端の色〔赤〕と〔青〕が比較的好まれる、という以外は、信頼し得る共通点はほとんどない。そのため今回の調査では、嗜好色の選択という方法を避け、日常的に使用されている色彩をその使用頻度によって考察するという方法により、客観性をもたせようと試みた。しかしながら、描画材料をクレヨンに限定したことにより、色彩のニュアンスの微妙なちがいなどは表現されず、色彩調査としては巾がせますぎたのではないと思われる。

1-2歳児の色彩の調査では、円形スクリブル以前の錯画期に分類される資料は数が少なく〔赤〕〔黒〕の使用頻度の高さは、むしろ命名期の生理色選択期の前兆と考えるべきかもしれない。また、この年齢の乳幼児からの資料は客観的な収集が困難であり、他の諸要素からの推察や、引用が多くなった。

0-3歳児の色彩上の発達には未解決な点が多く、特に2-3歳の色彩の獲得期は、幼児の成長と発達にとって、注目すべき影響を及ぼしていると考えられる。今後より多くの資料の収集と、より高度の分析による研究が必要と感じる。

引用文献

- 1) アルンハイム, R. 波多野完治・関計夫 (共訳) 美術と視覚上・ド 美術出版社 1964
- 2) 井手則雄 新編・幼年期の美術教育 誠文堂新光社 1975
- 3) リュケ, G. H. 須賀哲夫 (訳) 子どもの絵 金子書房 1979
- 4) 文部省 幼稚園教育指導書・領域編 絵画製作学習研究社 1969
- 5) ローエンフェルド 勝見勝 (訳) 子どもの絵 白揚社 1956
- 6) 久保貞次郎 色彩の心理 大日本図書 1966
- 7) 小林登 続・子どもは未来である メディスサイエンス社 1981
- 8) 西川好夫 新・色彩の心理 法政大学出版局 1972

参考文献

- 太田昭雄・河原英介 色彩と配色 グラフィック社 1974
- リード, H. 植村鷹千代・水沢孝策 (共訳) 芸術による教育 美術出版社 1953
- グッドナウ, J 須賀哲夫 (訳) 子どもの絵の世界 サイエンス社 1979
- 霜田静志 児童画の心理と教育 金子書房 1960
- 福田邦夫 赤橙黄緑青藍紫 青娥書房 1979
- 長坂光彦 絵画製作・造形 川島書店 1977
- 岡田清 幼児の絵の見方 創元社 1967